

JP63214193

Publication date: 1988-09-06

Inventor: YOSHIGI HISAHIRO; others: 02

Applicant: SAPPORO BREWERIES LTD

Classification:

- international: C12P19/00; C12Q1/40

- european:

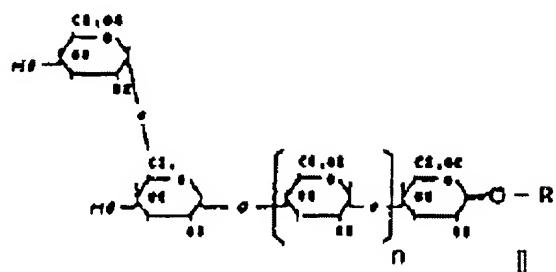
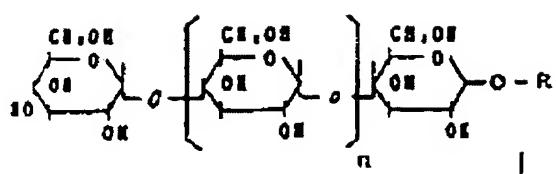
Application number: JP19870048386 19870303

Priority number(s):

Abstract of JP63214193

PURPOSE: To readily obtain a
obtain a 6-glucosylmaltooligosaccharide
derivative useful for measuring alpha-
amylase activity, such as clinical
diagnosis, by reacting a specific enzyme
with glucose or oligosaccharide and a
maltooligosaccharide derivative.

CONSTITUTION:(A) Glucose or an
oligosaccharide or aglycone thereof is
blended with (B) a maltooligosaccharide
derivative expressed by formula I [R is
(un) substituted nitrophenol residue; n is
2-5] so as to provide 0.2-5 weight ratio
(A/B) and 10-75wt.% substrate
concentration of A+B) to afford a
substrate solution (C). Oligo-1,6-
glucosidase originating from a
microorganism in an amount of 1-10
units based on 1g component (B) is then
added to the solution (C) and reacted at
20-50 deg.C and pH6-8 to form a 6-
glucosylmaltooligosaccharide derivative
(D) expressed by formula II (R and n are
same as those described above). The
resultant component (D), as necessary,
is used as a substrate and a sample is
reacted with alpha-glucosidase to
measure liberated nitrophenol based
compounds and measure the alpha-
amylase activity in the sample.



Data supplied from the esp@cenet database - Worldwide

⑪ 公開特許公報 (A) 昭63-214193

⑫ Int.Cl.

C 12 P 19/00
C 12 Q 1/40

識別記号

庁内整理番号

⑬ 公開 昭和63年(1988)9月6日

7236-4B
6807-4B

審査請求 未請求 発明の数 2 (全5頁)

⑭ 発明の名称 6-グルコシルマルトオリゴ糖誘導体の製法およびそれを用いるα-アミラーゼ活性測定法

⑮ 特願 昭62-48386

⑯ 出願 昭62(1987)3月3日

⑰ 発明者 吉儀 尚浩 静岡県焼津市塩津278-2

⑱ 発明者 山本 久夫 静岡県焼津市塩津278-2

⑲ 発明者 上村 稔 静岡県焼津市小川一丁田514-2

⑳ 出願人 サツボロビール株式会社 東京都中央区銀座7丁目10番1号

社

㉑ 代理人 弁理士 久保田 藤郎

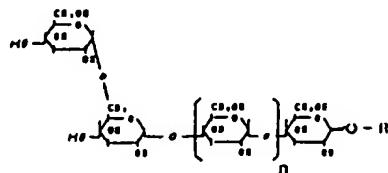
明細書

1. 発明の名称

6-グルコシルマルトオリゴ糖誘導体の製法およびそれを用いるα-アミラーゼ活性測定法

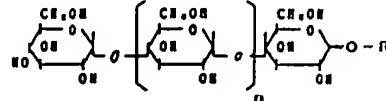
2. 特許請求の範囲

(1) グルコースもしくは少額もしくはそれらのアグリコンとマルトオリゴ糖誘導体にオリゴー1、6-グルコシダーゼを作用させることを特徴とする一般式



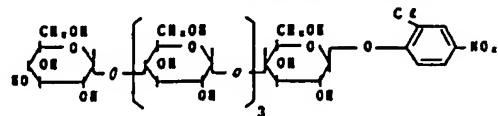
(式中Rは置換または未置換のニトロフェノール残基を示し、nは2~5の整数を示す。)で表わされる6-グルコシルマルトオリゴ糖誘導体の製法。

(2) マルトオリゴ糖誘導体が下記の構造を有するものである特許請求の範囲第1項記載の方法。

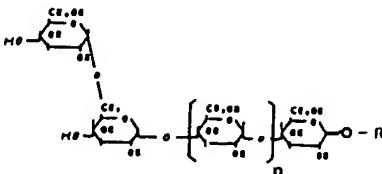


(式中Rは置換または未置換のニトロフェノール残基を示し、nは2~5の整数を示す。)で表わされる6-グルコシルマルトオリゴ糖誘導体の製法。

(3) マルトオリゴ糖誘導体が下記の構造を有するものである特許請求の範囲第1項記載の方法。



(4) 一般式



(式中Rは置換または未置換のニトロフェノール残基を示し、nは2~5の整数を示す。)で表わされる6-グルコシルマルトオリゴ糖誘導体を基質として、α-グルコシダーゼおよび/またはβ

ーグルコシダーゼ共存下に試料を接触させ、遊離するニトロフェノール系化合物を測定することにより、試料中の α -アミラーゼ活性を測定することを得たとする α -アミラーゼ活性の測定法。

3. 発明の詳細な説明

[産業上の利用分野]

本発明は、臨床診断、生化学的研究等において α -アミラーゼの活性を測定するために使用する試薬である6-グルコシルマルトオリゴ糖誘導体の製法およびそれを用いて α -アミラーゼの活性を測定する方法に関するものである。

[従来の技術]

尿または血清などの体液中に含まれる α -アミラーゼの活性測定は、臨床診断の場で広く実施されている。最近ヒト体液中の α -アミラーゼ活性測定用基質として、マルトオリゴ糖の還元末端グルコースにニトロフェノール系化合物を結合させた構造の明確な基質が合成され、次のような基質を用いる α -アミラーゼ測定試薬が提案されている。

(a) 2,4-ジクロロフェニル β -マルトペントオサイド α -アミラーゼ 2,4-ジクロロフェニル β -マルトサイド + マルトトリオース

(b) 2,4-ジクロロフェニル β -マルトサイド α -グルコシダーゼ 2,4-ジクロロフェニル β -グルコサイド + グルコース

(c) 2,4-ジクロロフェニル β -グルコサイド α -グルコシダーゼ 2,4-ジクロロフェニルトグルコース

(d) 2,4-ジクロロフェノール + α -アミノアントビリン α -化物キノン色素

[発明が解決しようとする問題点]

しかし、これらのマルトオリゴ糖誘導体を使用する α -アミラーゼ測定系では、共存酵素として使用する α -グルコシダーゼが基質にも作用することから、試薬ブランク値の上昇が著しいという問題点がある。さらに α -グルコシダーゼ液と基質液との一液化は、 α -グルコシダーゼの基質分解により、試薬の安定性を著しく損なうという共通の問題点があった。そこで本発明者等は現実研

α -ニトロフェニルマルトペントオサイド

[特開昭57-53079号公報]

α -ニトロフェニルマルトヘキサオサイド

[特開昭57-53079号公報]

α -ニトロフェニルマルトヘプタオサイド

[特開昭54-51892号公報]

2,4-ジクロロフェニルマルトペントオサイド

[特開昭56-35998号公報]

これらの化合物を基質とする α -アミラーゼ活性の測定様式を例示すると次の様になる。

α -ニトロフェニル α -マルトペントオサイドの場合

(a) α -ニトロフェニル α -マルトペントオサイド α -アミラーゼ α -ニトロフェニル α -マルトサイド + マルトトリオース

(b) α -ニトロフェニル α -マルトサイド α -グルコシダーゼ α -ニトロフェノール + グルコース

2,4-ジクロロフェニル β -マルトペントオサイドの場合

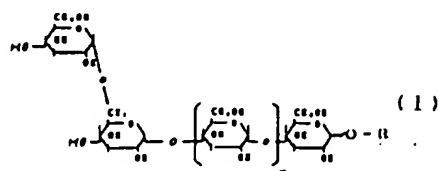
究を重ね、マルトオリゴ糖誘導体の非還元性末端グルコースにグルコースを α -1、6結合させた6-グルコシルマルトオリゴ糖誘導体を用いれば、これらの問題点が解決できることを知り、本発明を完成するに至った。

[問題点を解決するための手段]

上記目的を達成することに成功した本発明は、マルトオリゴ糖の還元性末端側グルコースに、ニトロフェノール系化合物を α または β 結合させたマルトオリゴ糖誘導体とグルコースもしくは少額もしくはそれらのアグリコンの混合溶液にオリゴ-1、6-グルコシダーゼ(イソマルターゼ、EC 3.2.1.10)を作用させて、マルトオリゴ糖誘導体の非還元性末端側グルコースにグルコースを α -1、6結合させた6-グルコシルマルトオリゴ糖誘導体を製造する方法および当該6-グルコシルマルトオリゴ糖を基質として α -グルコシダーゼおよび/または β -グルコシダーゼ共存下に試料を接触させ、遊離するニトロフェノール系化合物を測定することにより、試料中の α

α-アミラーゼ活性を測定する方法を提供するものである。

本発明の6-グルコシルマルトオリゴ糖誘導体は、下記の構造を有するものである。

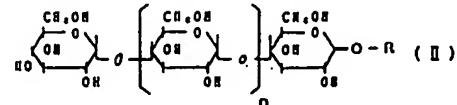


(式中Rは置換または未置換のニトロフェノール残基を示し、nは2~5の整数を示す。)ここで上記一般式(I)におけるRの具体例を示すと、例えば2-ニトロフェニル基、4-ニトロフェニル基、2、4-ジニトロフェニル基およびこれらの芳香族水素を单独あるいは複数のハロゲン基、スルホン酸基またはカルボン酸基で置換したもの等が挙げることができる。

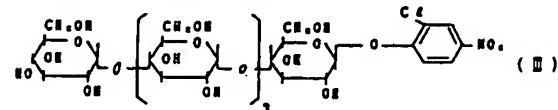
6-グルコシルマルトオリゴ糖誘導体は、グルコースもしくは少額もしくはそれらのアグリコンとマルトオリゴ糖誘導体にオリゴー1、6-グル

ルコシダーゼは動物、植物、微生物など如何なる起源のものでもよい。反応条件としては、グルコースもしくは少額もしくはそれらのアグリコン/マルトオリゴ糖誘導体の過量比が0.2~5.0、基質濃度1.0~7.5%の溶液にオリゴー1、6-グルコシダーゼをマルトオリゴ糖誘導体1gあたり1~10単位(酵素1単位は、イソマルトースに作用し1分間に1μmolのグルコシド結合を切断する酵素量)加え、反応温度を20~50℃、pH 6~8の範囲で行えばよい。特に鮮ましくは、グルコースもしくは少額もしくはそれらのアグリコン/マルトオリゴ糖誘導体の過量比が約0.51、基質濃度1.4~9%の溶液に、オリゴー1、6-グルコシダーゼをマルトオリゴ糖誘導体1gあたり1~3.9単位加え、反応温度30℃、pH 7付近がよい。生成した6-グルコシルマルトオリゴ糖誘導体は280nmの吸光度を測定することにより、高濃度液体クロマトグラフィーで定量分析することができる。反応後、適当な方法、例えばゲルろ過クロマトグラフィーにより目的

コシダーゼを作用させることにより製造することができる。ここで、マルトオリゴ糖誘導体としては、下記一般(II)の構造を有するものである。



(式中Rは置換または未置換のニトロフェノール残基を示し、nは2~5の整数を示す。)なお、一般式(II)におけるRの具体例は前記一般式(I)の場合と同じである。一般式(II)の誘導体、なかでも特に下式(III)



で示される2-クロロ-4-ニトロフェニルβ-マルトペンタオサイドが好適である。マルトオリゴ糖誘導体にグルコースをα-1、6結合させて、6-グルコシルマルトオリゴ糖誘導体を製造するためにはオリゴー1、6-グルコシダーゼを使用するが、ここで使用するオリゴー1、6-グ

ルコシダーゼは動物、植物、微生物など如何なる起源のものでもよい。

次に6-グルコシルマルトオリゴ糖誘導体によるα-アミラーゼの測定法に関して説明する。測定時に用いるα-グルコシダーゼは動物、植物、微生物など如何なる起源のものでもよいが、特に酵母から得たものがその基質特異性の点から望ましい。すなわち、酵母起源のα-グルコシダーゼはアグリコン特異性が広く、さらにマルトトリオサイド以下のグルコサイドにはよく作用するが、マルトテトラオサイド以上のグルコサイドには作用し難く、またα-1、6結合には作用しない点で本発明の目的に適合している。β-グルコシダーゼも如何なる起源のものでもよく、例えばアーモンドから得たものが使用できる。

α-グルコシダーゼ、β-グルコシダーゼの使用法は具体的には、

- α-グルコシダーゼ
- β-グルコシダーゼ
- α-グルコシダーゼおよびβ-グルコシダーゼ

セ

のいずれの方法でもよい。

本発明の方法は必要によりその他の添加物を加えてよい。

本発明は α -グルコシルマルトオリゴ糖誘導体に、 α -グルコシダーゼおよび/または β -グルコシダーゼ共存下に試料を接触させ、遊離するニトロフェノール系化合物を測定することにより、試料中の α -アミラーゼ活性を測定することにより、ニトロフェノール系化合物の測定法としては、基質から遊離したニトロフェノール系化合物が α -ニトロフェノールや2-クロロ-4-ニトロフェノールなどの場合には、直接吸光度を測定すればよく、また吸光度変化を直接測定できない場合は、呈色試薬例えば4-アミノアンチビリンなどの化合物と酸化総合させ、その発色強度を測定すればよい。

本発明によれば、本試薬は従来のこの種の試薬と同様、血清、尿、すい液、だ液などに含まれる α -アミラーゼの活性測定に広く使用することが

できる。

【実施例】

次に本発明を実施例によりさらに詳しく説明する。

実施例1

高濃度に溶解させた1.01gのイソマルトトリオースと1.97gの2-クロロ-4-ニトロフェニル β -マルトペントオサイド混合溶液（基質濃度14.9%）にバチルスセレウス（*Bacillus cereus*）NY-14のオリゴ-1、6-グルコシダーゼを2-クロロ-4-ニトロフェニル β -マルトペントオサイド1gあたり1.39単位加え、温度は30℃、pH 6.9で反応させたところ、24時間後に基質である2-クロロ-4-ニトロフェニル β -マルトペントオサイドの20%を、2-クロロ-4-ニトロフェニル β -6-グルコシルマルトペントオサイドに変換することができた。

反応終了後、反応液をいくつかに分け、それぞれをゲルろ過クロマトカラム（2.2×38cm

）に負荷し、水で漏出することにより2-クロロ-4-ニトロフェニル β -6⁵-グルコシルマルトペントオサイドを精製した後、凍結乾燥して白色粉末0.35gを得た。

実施例2

試料中の α -アミラーゼ活性を、下記の試薬を用い、下記方法により測定した。

試薬：

50 mM グッドバッファー	pH 7.0
α -グルコシダーゼ（酵母）	600 U/mI
β -グルコシダーゼ（アーモンド）	7 U/mI

第1表に示される基質 2 mg/mI

第1表

試薬		基質名
本発明	A	2-クロロ-4-ニトロフェニル β -6 ⁵ -グルコシルマルトペントオサイド
比較例	B	2-クロロ-4-ニトロフェニル β -マルトペントオサイド

測定法：

上記試薬3mIを取り、試薬プランク値の経時変化を調べた。（測定波長400nm、反応温度37℃）

試料（血清）20μlに試薬3mIを添加し、添加後4～6分後の吸光度変化（ α -アミラーゼ活性）を測定した。（測定波長400nm、反応温度37℃）

試薬プランク値の経時変化を第2表に、血清の

吸光度変化を第3表に示す。

第3表

第2表

試 液	本発明 A	比較例 B
反応開始時	0.0794	0.0798
10分後	0.1179	0.1433
30分後	0.1265	0.2489
60分後	0.1381	0.5459

試 液		1分間の吸光度変化
本発明	A	0.038
比較例	B	0.050

本発明の試液Aは試液Bと比較して、試液プランク値の上昇は小さい。また、 α -アミラーゼ活性値は試液Bの約76%になっているが、1分間の吸光度変化が0.01以上あれば測定上十分であるので、0.038という値は十分に実用上測定可能な値である。

【発明の効果】

本発明によれば、 α -アミラーゼ測定時に、上述のように共存酵素である α -グルコシダーゼによるプランク値の上昇を押えることができ、また基質溶解放液と α -グルコシダーゼおよび／または β -グルコシダーゼ溶解放液との一液化が可能とな

り、自動分析機にもかけられるなど α -アミラーゼの活性測定法においてきわめて有用である。

特許出願人 サッポロビール株式会社

代理人弁理士 久保田 薫郎

